

春秋（コラム）

1998/01/16, 日本経済新聞 朝刊, 1 ページ, , 586 文字

正月の十五日、あるいはその前後三日間を小正月、女正月という。年末、年始、家事に忙殺される女性を慰労する習慣だが、今や廃れつつあるようだ。出来合いのおせちやホテルで過ごす時代に不要との見方もあるが、慰めより家事労働の正当な評価を、の声も聞かれる。

昨年末、「あなたの家事の値段はおいくらですか？」(大蔵省印刷局)という本が出た。無償労働の値段を、経済企画庁が初めて試算した報告である。活動別、性別、年代別、都道府県別など詳細だが、女性の場合、炊事、洗濯などの家事、買い物、育児、介護・看護、社会的活動で年間八十四兆三千億円。男性は十四兆五千億円だった。

女性一人当たりでは、炊事で五十三万円、洗濯二十五万円、買い物二十二万五千元、無償労働全体では百六十万七千元。いずれも九一年の統計をベースに、家事などに充てた時間に、時間当たり平均賃金をかけて割り出した。そんなに働いたと思うか、低すぎると感じるか。この数字にも女性は男性の六割強という賃金格差が反映されている。

小欄の上で連載中の「女たちの静かな革命」の世論調査では、女性の社会進出が進まない理由のトップに「家事や育児などハンディがある」ことが挙げられた。無償労働のハンディで女性は八十四兆円を失った計算になる。銀行が抱える七十六兆円の「不良債権」も大問題だが、家庭内の八十四兆円の背景も考えなければならない時が来ている。